熊本の児童文学

今村葦子『あほうどり』論（上）

堀畑真紀子

はじめに

作者、今村が「まったくのただ書きたいから書いた」[1]と述べるのが、『つるべっ子』『あほうどり』『ふたつの家のちえ子』『良夫とかな子』の四作品である。筆者はこれを今村作品の初期四部作と称している。『良夫とかな子』を除く三作品は雑誌『子どもの館』（福音館書店）への投稿作品として書かれた。今回採り上げる『あほうどり』は『子どもの館』一九八二年七月号に掲載され、一九八七年二月に評論社から単行本で出版、翌年、第10回路傍の石幼少年文学賞を受賞する。

『あほどり』について、長谷川幸男氏は「新鮮な人間愛を感じさせる作品」で、「筆者は、ひっそりとして目立たないが、そんなあたりまえの人間が、人間の心を、いとおしみ育くむ様を描きたかったのだろう」「人間存在の普遍性は勝ち得た」と高く評価する[2]。その後、最首悟氏が「『子どもにはかくあってほしいなあ』という大人の願望が結晶したような『子どもの本』」[3]と評する。また、沼田森氏は、信太が「身近にある自然とじつに細やかに交歓することのできる人として、造形されて」おり、「周りに現れてくる植物や昆虫」に作者の細やかな視線を感じ取ることができる。また、信太を愛おしむ仙三じいさんの視線もまた「身近な者への細やかな気配りに充ちて」いるとして評価する[4]。

この三編は何れも書評である。本論は、作者手書きの貴重な資料や書簡を基に、拙稿『ふたつの家のちえ子』[5]で述べた、今村作品の核「神話的時間」がどのように描かれているのかを考察するものである。本論は、紙面の都合上、二部構成とする。まず（上）では、投稿作品から単行本になる時の改変について、その理由と内容の変化について考察する。（下）では、「信太とちよ子」像を通して「神話的時間」がどのように描かれているのかを考える。

一　作者の意図

本作品は単行本になる際、投稿作品が改変されている。それについて、作者は次のように語っている。改変理由は、当時の小学校に落第制度が存在しないことや、「落第」などの差別用語を使っていることを、編集者から指摘されたことによる。当時、児童書出版事情に関して何も知らない作者は、編集者の指摘をそのまま受け入れ改変する。しかし、「あほうどり」という題名だけは、どうしても譲ることが出来ず、「あとがき」に本物のアホウドリに申し訳ないという思いで、悲しい歴史に触れるのである(6)。

作者は当時を振り返り、投稿時は、漢字の使い分けも知らず、枚数も自由にやっていたし、「子どもの館」の編集者からもチェックがなかった。しかし『あほうどり』の出版の依頼を受けた時、初めて読者対象という制限があることを知った。そして、この作品は依頼を受けたら書けなかったであろうという。理由は、小学四・五年生対象では原稿用紙八〇枚でも多いこと、情緒障がい及び知的障がいがテーマだと出版許可が出にくいことからである。児童書の出版事情を知らなかったことが幸いして、作者は慣れ親しんだ大川の野原の草花や虫や鳥を楽しみながら描き、信太やちよ子と同じ思いを抱きながら物語を書き進めた。当時、信太のような子どもは珍しくなかったし、仙三じいさんのような人も何処にでもいたので、それをそのまま書いただけであると作者は述べる。これは作者が信太を知的障がい者として、意識して描かなかったということである。実際に、作者は障がいを一つの個性として受け取り、信太を障がいを持つ子どもとは考えていない(7)。これは、本作品を読み解く上で、注目しなければならないことである。

また、投稿から三〇年余り経た現在、作者が一読者として本書を読み返すと、胸にこみ上げてくる場面が数カ所あるという。それは、ちよ子が信太の前で運動靴に小石に入れて歩いて見せる場面、その後のちよ子が母さんに飛びついていく場面、それを見送る信太の後姿である。さらに、『あほうどり』執筆時は、球磨村在住の両親は健在で、時間も緩やかに流れていた。だからこそ描けたのだろうという(8)。

筆者の手元には、作者から送られてきた写真のカラーコピーがある。『あほうどり』の舞台となった球磨川の河原(9)である。三十年以上前の写真で、既にスーパー堤防の工事が始まっており、蛇籠の土手も消えている。が、村の子どもたちの泳ぎ場や野原は、かろうじて残っている。ただ、写真では窺えないが、球磨川は以前に較べて汚れていると作者は言う。この写真は、帰省中、大川に新しくかかった橋を、父親の忠泰と二人で見に行った時のものである。作者は故郷球磨村について次のように述べる。

……一体に「ふるさと」については書きにくいものです。そ

のことにはわけがあって、それは、「ふるさと」について書くということが、肉親や自分自身について書くということに、極めてよく似た行為だからだと思われます。愛憎、悲喜、こもごも。なるべくなら、ふれずにそっとしておきたい。（中略）

それではその（私注…ふるさと）ゆたかさとは、いったい何のことでしょう？そうです。……それこそ愛憎、悲喜、こもごも。そのことだと私は思います。良かれ悪しかれ、人間は「やじろべえ」のようにして立つものだと私は思うのです。たとえていえば、右手に光ならば、左手には闇。あるいは生きることと死ぬこと、など。[10]

私の中のふるさと。……とつぶやいているうちに、連想が奇妙な方向によじれて、昔読んだ小説の一シーンを思い出しました。

はじめて人体の骨格模型、つまり骸骨を見た少年が、自分の中にも〈それ〉があるといって、怖れ、泣くシーン。…たしか、レイ・ブラッドベリの短編の一場面だったように覚えています。でも私はなぜ、「ふるさと」という言葉から、こんな場面を連想したのでしょう。（中略）

祖父の死、転居、転校、父の不在。小さな出来事の積み重ねが、幼ない心に、ある種の感情を確実に植えつけ、育てあげてゆきました。それが「無常感」でなかったと、だれが言えるでしょう。

そうです。冒頭にあげた、自分の中にある骸骨を怖れて泣いた少年は、本能的に、自分の中にある「死」を怖れて泣いたのではなかったでしょうか。（中略）

ふるさととは、単なる地理上の場所ではないのだと私は思います。私の中の骸骨。否応（いやおう）のない「ふるさと」。だからこそ、都会の公園のかたすみに見た水引草の一茎にも、立ちくらみのするような気持で、あの小川の、あの「涼戸の瀬（りょうどのせ）」を思いだすのです。[11]

故郷は「愛憎、悲喜、こもごも」が存在しており、幼い心に「無常感」を植え付けた所である。それらは作者の中の「骸骨」として、死ぬまで生き続けていくし、作者は、その骸骨を物語にする。ならば、今村作品の中にこれらが存在しているということである。この点も、本作品を読み解く上で注目しなければならないことである。

したがって、『あほうどり』における作者の意図は次の二点である。

（一）信太を知的障がいを持つ子どもとして描いていないこと。

（二）故郷球磨村は「愛憎、悲喜、こもごも」が存在し、作者に「無常観」を植え付けたということ。

この二点に着眼して、作品を読み解いていく必要があろう。が、今回の改変については（一）に焦点を絞り論じていく。（二）については、（下）の作品分析で触れていきたい。

二　改変箇所

ここでは、改変箇所とその理由を指摘し、改変によって作品がどのように変化したのかを考察する。作品の引用は、初出・雑誌『子どもの館』（1982・7）、単行本・『あほうどり』（評論社・1987）による。

①　初出「あほうどり」

小さい時におとうさんとおかあさんをなくし、それ以来、おかあさんのおとうさんである踏切小屋の仙三じいさんのもとで暮らしていますが、学校の方は、何度も何度も落第して、この四月に、ちよ子たちと同じ四年生になったのです。（5頁）

（傍線筆者）

単行本『あほうどり』

小さい時におとうさんとおかあさんをなくし、それ以来、おかあさんのおとうさんである踏切小屋の仙三じいさんのもとで暮らしていますが、信太はどうしても、うまくしゃべることができないのです。「あほうどり」と呼ばれるのは、そのためでした。それでも、この四月には、ちよ子たちと同じ四年生になりました。（12頁）

初出では、信太が何度も落第しているのに対して、単行本では、「うまくしゃべことができない」が、ちよ子と同じ四年生であることが述べられている。これは、前述したように、「落第」に関する問題の指摘を受けて、作者が改変した箇所である。

当時の「落第」について、八幡ゆかり氏の論文[12]に次のようなことが述べられている。一九五〇年後半、知的障がい者の為の特殊学級増設が実施されるが、地域によって格差が出る。一九六七年調査で、熊本は充足率の低い地域として挙げられる。特殊学級のない地域は、就学を遅らせなどして通常学級に入るが、学年が進むにつれて取り残され、全くの「お客様」になってしまうという状況であった。

「当時、信太のような子どもは珍しくなかった」と指摘する作者の主張から、多分、球磨村には特殊学級が存在せず、信太のような知的障がい者は通常学級で学んでいたと思われる。「お客様」となった信太が、再び同じ学年で学んだことは十分に考えられることである。さらに、特殊学級充足率の低い熊本の、市内から離れた球磨村となれば尚更である。

また、この箇所の改変について最首氏は、「作品の骨格を変えてしまうほどの影響がある」と主張する。作品の見せ場である、溺れているちよ子を信太が助ける場面で、信太は「そうとう大きい子でなければならない」し、「もともと知恵遅れでのんびりしている子が、俊敏かつ抜群の水泳能力を見せるなどあり難いことなのに、さらに上塗りして不自然にしてしまった」と評する[13]。この点については、③で少し触れるが、改変によってファンタジー的要素が織り込まれ、信太に何らかの力が

備わってることの伏線と解釈することができる。

② 初出

騒がしい教室のすみっこで、なんということなくあたりをながめているのが、信太でした。（6頁）

単行本

騒がしい教室のすみっこで、ひとりだけ、のんびりとあたりをながめているのが信太でした。（18頁）

初出での信太は、はっきりとした理由や目的意識がなく、ぼんやりと「あたりをながめている」のに対して、単行本では、心身共にくつろいでゆったりして「あたりをながめてい」る。双方に内容の違いは左程ないが、後者の方が「騒がしい」と「のんびり」を対比させることで、信太に流れる時間の緩やかさを、より鮮明に感じ取ることができる。

③ 初出

踏切番として、無事に汽車は通し終えたものの、仙三じいさんは、一度に娘夫婦二人をなくしました。残ったのは、まだ三つの小さな信太だけでした。（20頁）

単行本

踏切番として、無事に汽車は通し終えたものの、仙三じいさんは、一度に娘夫婦二人をなくしました。残ったのは、まだ三つの小さな信太だけでした。信太が、うまく口をきくことができなくなったのは、そのすぐあとのことでした（72頁）

大雨の夜、村人総出で大川での堤防修理の時、足場の悪い所で土を積み上げていた父親が足をすべらせ、とっさに手を出した母親もろともに川に呑み込まれる。単行本では、両親の死と信太の「うまく口をきくことができなくなった」ことに、何らかの関係があることを暗示させる。信太が、溺れるちよ子を助けたことを知った仙三じいさんが「……そうか、あの大川でなあ」（163頁）と言った意味もここにある。この改変は、後の信太があほうどりになり、ちよ子を助けるという場面に生きることになる。つまり、論理で説明できないことの伏線とし、作品にファンタジー的要素を織り込んだのである。

当時、特殊教育の第一人者である三木安正氏が次のようなことを指摘している[14]。「…もっとも大きな問題は、盲児や聾児であると親は比較的肩身の狭い思いをしなくてもすむが、精神薄弱児や肢体不自由児であると、親は非常に世間体を気にすることである。……日本の親の場合には遺伝性のものとされると家系のけがれを現したものとして、その責任がどこにあるということの問題などでなく、非常に肩身のせまい思いをし、外因性の場合の方が、いわば救いがあるように感ぜられているのではないかということである。家系に汚点をのこしたということになると、兄弟、姉妹の結婚とか出世とかにもすぐ結びつくわ

けである」。ここで述べられる親達への配慮から、信太の「うまく口をきくことができなくなった」理由を後天的としたのではないことを言い添えておく。

④ 初出

クギのつぎには、死んだ虫が出てきました。死んだ虫は、手も足も羽根もちゃんとついていました。死んでいて動かないけれど、それは死んでいるだけで、姿は生きている時のままでした。まるで、かたいブローチのようにぴかぴかに光って見えました。

虫の横には、さまざまな石が並べられました。雪のように白いのから木の葉のように美しい緑色をしたのまでさまざまでした。どの石もそれぞれの形をしていました。石が終わると、きらきら光ったお酒のびんのふたが七つも転がりでてきました。右のポケットは、それでおしまいでした。

左のポケットから出てきたのは、何日かかってかためた砂の玉でした。どっしりとしたその砂の玉は、信太が自分でつくったのです。野球ボールくらいの大きさで、まんまるい形をしており、表面は何度もなでかためたため、つるつると黒く光っていました。投げても割れない立派な砂の玉でした。

砂の玉のあとからは、使い古した青いひもだとか、しぼんでしまったゴム風船だとかが、つぎつぎに出てきました。（23頁）

単行本

クギのつぎには、鳥が食べ残したクワガタ虫の、かたい、はさみの部分が出てきました。鳥も、そこだけは食べないのです。その頭には、ビロードのような茶色の毛がはえていて、目もついていました。まんまるいガラス玉のようになってしまった目も茶色で、はさみは動きました。

それから信太は、青いほおずきを一個とりだし、つぎに、マッチ箱をとりだしました。マッチ箱の中から、信太は、まだ生きているカタツムリを、そっと、とりだしました。カタツムリは、マッチ箱から出されても、もりもりと木の葉を食べていました。右のポケットはそれでおしまいでした。

左のポケットから出てきたのは、何日もかかって、ナイフで削った木の玉でした。どっしりしたその木の玉は、信太が自分で作ったのです。野球のボールぐらいの大きさで、まんまるい形をしており、表面は何度も何度もトクサでみがいたために、ぴかぴかに光っていました。

そのあとからは、ビー玉やおはじき、いつか縁日で買ってもらった、鼻のもげたガラスの象、ちぎれたボタン、石ころ、キジバトの羽根、風船、たこ糸、荷ふだからはずした細い針金などが、つぎつぎに出てきました。（84頁）

単行本では、これらの宝物について、カラー写真を差し挟んである。今村自身がこの本の装幀、挿絵をしていることから、

沼田森氏が述べる[15]ように、作者の遊び心を感じ取ることができる。初出は「手も足も羽根」もついているが、動かない「死んだ虫」である。その「死んだ」を単行本では「鳥が食べ残した」とし、「ビロードのような茶色の毛」や「ガラス玉のようなってしまった」茶色の目も残り、まだ「はさみ」も動く状態にある。「死んだ」とすると、描写は静の状態になるのに対し、「食べ残した」と表現すると、描写に動きが生じる。そして「もりもり木の葉を食べる」、今まさに生きているかたつむりが登場する。死んだ虫の部分的動きから実際に生きている虫の動きへと移る描写は、ちよ子の次第に高まる感情と重なり合う。読者は信太の笑顔と、顔をまっ赤にして宝物に見入るちよ子の姿を思い浮かべることができる。

⑤　初出

四年生になったら、大川で泳ぐというのが、昔からの取りきめでした。四年生になって、大川で泳ぐということは、むずかしく言うと、もう三年生でも一年生でもないということでした。これは四年生の夏休みなのです。（27頁）

単行本

四年生になったら、大川で泳いでもいいというのが、昔からの取り決めでした。ですから、四年生になって、大川で泳ぐということは、それだけ、おとなになったということでした。（97頁）

表現を変えただけで内容は同じである。初出の「むずかしく言う」は口語調であるため、語り手が子どもに語って聞かせる場をよりはっきり示している。一方、「おとなになった」という表現は、ちよ子が大川の渦に近づくことへの伏線と解釈出来る。幼い時は、渦の下のカッパの存在に恐怖を抱いていたが、四年生になると、渦に巻き込まれた合歓の花びらがどうなるのかという好奇心の方が強くなる。アニミズムが崩れる歳は、正しくちよ子の歳なのである。[16]

⑥　初出

ちよ子は、自分はもう二度と、あほうどりにいたずらをしないだろうと思いました。そう思うと、なんだか、心の中がからっぽになったような、かなしく、さびしい気がするのでした。ほんとうは、もっといたずらをして、もっとからかっていたいのに。そしていつまでもあんなふうにしていたいのにとおもうのですが、いくらそう思っても、もうこれからはできないのです。ちよ子は、いままであほうどりとあんなふうな遊びをするのが、いちばん楽しかったのでした。（40頁）

単行本

ちよ子は、自分はもう二度と、あほうどりにいじわるをしないだろうと思いました。そう思うと、何だか、心の中がからっぽになったような、かなしく、さびしい気がしました。ほんとうは、もっといじわるをして、もっとからかっていたいのに。

……そしていつまでも、いままでのようにしたいのにと思うのですが、いくらそう思っても、もうこれからはできないのです。

（152頁）

「いたずら」と「いじわる」の意味を日本国語大辞典で見ると、前者が「子どもがふざけてするわるさ」「他人に迷惑をかけるよくない振る舞い」の意で、後者が「他人、特に弱い者に対するしうちをすること」「人を苦しめたり、困らせたりして、性質が素直でないこと」の意である。よって初出の傍線部「あほうどりとあんなふうな遊びをするのが、いちばん楽しかった」は、「いたずら」であったから感じる思いである。単行本で「いじわる」と変えたのは、教育界のチェックを意識してのことであろう。しかし、ちよ子は信太を弱者、障害のある子とは見ていない。だからこそ、自身の感情を信太にぶつけた時、信太も同じようにすることを期待するのである。が、信太はいつも笑い、「どこかはるかなところを見ているような、遠い目」をしている。ちよ子の期待ははずれ、後に残るのは自分がした事への心の痛みである。また、ちよ子には、信太を苦しめようという悪意は存在しないし、信太もちよ子のいたずらを悪意と受け止めていない。もし、精神的な苦痛を信太が感じていたとしたら、「とべっ、あほうどり！」と、ちよ子達の歌うような声に合わせて、楽しそうにかかとを上げ下げしながら笑うであろうか。また、自分の大事な宝をちよ子に見せるだろうか。そして、ちよ子の真似をして、信太も靴に石を入れ、すまして、よろよろしながら帰って行くだろうか。ちよ子と信太は、子どもの遊びの世界で楽しんでいるのである。このように考えると、ちよ子の信太への行動は「いじわる」ではなく「いたずら」といえよう。

以上、六つの改変を指摘したが、大きな違いは次の三点である。

（1）初出の信太は、落第している知的障がい児で、年齢がちよ子より上という設定であるのに対して、単行本では、信太の知的な障がいという要素を残しつつも、年齢はちよ子と同じとする。

（2）単行本では、上手く喋ることが出来なくなった理由を、信太の両親が亡くなった事に関係していることを付け加える。

（3）ちよ子の信太への言動を、初出では「いたずら」としていたのを、単行本では「いじわる」に改め、「あほうどりとあんなふうな遊びをするのがいちばん楽しかった」を削除した。

これらは、作者が指摘しているように、当時の児童書出版事情からである。教育界のチェックが厳しい事や、知的障がいがテーマだと出版許可が出にくい事からである。

では、改変によって作品はどのように変わったのか。

まず一つ目は、ちよ子像の変化である。本作品は、日常を舞台とした「神話的時間」が描かれた。「神話的時間」とは幼い子どもが持つ時間である。効率、能率を優先させる日常の時間とは異なり、偏見のない、ありのままを見ることができる時間である。そこには、子どもの残酷性なども含め「愛憎、悲喜、こもごも」「無常観」が存在する。また、この時間は、何の力も持たない子どもが、ある日突然、何かの力を発揮すると信じられている時間でもある。だから、日本の説話や神話、昔話では、子どもを、特に障がいを持つ子を神の子として描き続けてきた。ちよ子と信太はこの時間の中にいる。作者は、信太を知的障がいを持つ子とはとらえていなし、それを書いている訳でもないと主張する。なぜならば、子どもの世界では、そのような区別は存在しない、また、あるがままを受け入れ成長していく時期が人にはあるという考えだからである[12]。しかし、改変により作者の意図した世界が、少し変化した。改変前、ちよ子は信太と対等に向き合っている。そこに配慮や優劣関係は存在しない。しかし、「いたずら」を「いじわる」に改め、「遊びをするのが楽しかった」の削除は、ちよ子の信太への言動が遊びではなく、信太を傷つけるものであったことを示す。そして、登校時、ちよ子が信太を誘いに行くという行為の中に、障がいを持つ人に対する配慮のある善意を窺い知ることができる。ここは大人の視点である。それに対して、改変前は子どもの視点で描かれる。以前のような「いたずら」はなくなるが、のんびり屋の信太にいらつきながらも、ちよ子は信太と友情を育んでいくであろうことを想像できる。ありのままを受け入れ、少しずつ成長していくちよ子の姿である。

二つ目は、信太像が変化したことである。信太が上手く喋ることが出来なくなったのは、両親の死と重なる。これによって、信太が大川で溺れるちよ子を助けることができたという解釈が生まれる。仙三じいさんがしみじみとした声で「……そうか、あの大川でなあ」という意味がここにある。ちよ子を助ける信太はいつもの彼ではなかった。

「わあっ」という大声をあげて、立ちすくんでいるみんなの間を駆け抜け、まっしぐらに、おぼれているちよ子をめがけて、めちゃめちゃに泳ぎはじめた子がいました。

（中略）

「助けて。……あほうどり、助けて」

あえぐように言って、信太にしがみつきました。抱きつかれて泳ぐことができなくなった信太は、ちよ子といっしょに、渦のまん中に沈みました。ぐるぐるまわりながら、吸い込まれるように沈んだのです。

信太の耳は、じんじんと鳴りました。川底に着いた信太は、力いっぱい、ちよ子をつきはなし、それから、ちよ子のうしろにまわって、思いっきり川底をけりました。片手でちよ子をうしろから抱きしめて、川面にむかって、力強く水をかきま

した。（141～145頁）

この場面での信太は、ちよ子達がいつもからかっている信太ではない。勇気があり、判断力もある。今までの信太からはありえない行動力である。なぜ、ここで信太は変わるのか。信太は、大川で亡くなった両親に守られている、あるいは、大川から何らかの威力を受け取ったという読みが出来る。つまり、信太は異能を持つ子どもであったという解釈である。日本の神話や説話、昔話には、体の小さな主人公が異能を発揮し、人々に幸いをもたらすという話がある。これら体の小さな主人公達は「小さ子」と呼ばれ、神の子どもとして理解されている。一寸法師や桃太郎、瓜子姫などがそうである[18]。信太は、小さな子どもとして異常な誕生をするわけではないが、水との関わりや、異形な者が異能を発揮する点が「小さ子」話と似通っている。このようにファンタジー的な要素を織り込んだことで、この場面に新たな解釈が生まれ、作品に奥行きを持たせることになった。また、本作品の特徴、信太を知的障がい者と捉えていない点に着眼すると、ちよ子と他の子ども達が信太の意外な側面を知る、象徴的な場面と解釈できる。これまでの信太の言動から、ちよ子を助けることが出来るか否かは問題ではない。ちよ子や他の子どもたちが、信太の、別の力を目の当たりにし、彼に対する認識を変える象徴的な場面なのである。現実味に欠けるという批判もあるだろうが、ここでは信太があほうどりになることが重要なのである。読者は、信太とあほうどりが重ねられたことに意表をつかれ、あほうどりがちよ子を助けるまでの緊迫感、ちよ子が助かったことの安堵感、その後のいつもの信太に戻っている可笑しさへと、一気に読み進める。そして、ゆき子やかなえが回想する場面で、ちよ子の思いを感じ取る。そこに、論理や理屈では計ることの出来ない感動がある。改変前はこの解釈のみとなる。

このように改変前と後を比較すると、前者が子ども（ちよ子）の視点で描かれていたのに対して、後者は大人の視点が入ってしまったことがわかる。それは信太が知的障がいを持つ子どもであるという視点である。これによって、ちよ子像と信太像に変化が生まれたのである。

三　題名「あほうどり」

単行本にする時の最も大きな問題は、「あほうどり」という題名であった。「あほう」が差別用語にあたるという指摘を受けるのである。その時、作者は「『あほうどり』が差部用語に触れるのであれば、ほんもののあほうどりはどう考えたらいいのだろう」と思う。子どもの本の場合、教育界のチェックが厳しいこともあり、作者は悩むが、どんなに考えても題名だけは変えることができないということで、多少強引に認めてもらう。このような事情もあり、「あとがき」で鳥のアホウドリの歴史

に触れることにした[19]。その「あとがき」の一部を引用する。

ほんとうの「あほうどり」は、世界で最も大きい、美しい海鳥です。拡げると二メートルにもなる「あほうどり」の翼は、たいへん力強く、時速百キロものスピードで、四日五日も飛びつづけることができるほどです。

でも、そんな「あほうどり」にもかなしい歴史がありました。

それほど力強く飛ぶことができるのに、「あほうどり」は、歩くことが苦手なのです。しかも、大きな体を風にのせて浮かびあがるためには、歩くだけではなしに、走らなければならないのです。そんなわけですから、この鳥をつかまえようと思えば、それはわけのないことでした。

人はそっと、風上から「あほうどり」に近づきます。すると、舞い上がるためには、風上にむかったほうが便利ですから、「あほうどり」は、首をのばして、人間にむかって、よたよたと走ってきます。飛んで逃げようと思えば、自然にそうなるわけです。

「あほうどり」は殺されました。殺して羽根をとり、「羽根ぶとん」をつくるのです。一年に二十万羽もの「あほうどり」は殺され、昭和三十年には、日本の「あほうどり」は、たった十九羽になっていました。（中略）

ためしに、ちょっと目をつぶってみてください。ゆうゆうとした姿で舞い続ける、「あほうどり」が見えないでしょうか。真っ青な空と海のあいだで、大きな「あほうどり」の姿は、雪のような白さです。大空に「いのち」が飛んでいるのです。

信太という「あほうどり」のお話を書くときに、私の頭の中には、いつも、この「ほんもののあほうどり」の姿がありました。「信太」という名前も、「あほうどり」を現わす漢字「信天翁」から、「信」の一字をもらったものです。

ここには、信太と「あほうどり」が結びついたところで、この作品は生まれていることが述べられている。つまり、信太が鳥の「アホウドリ」の要素を持つ存在として描かれているということである。信太は、ちえ子の「いたずら」を正面から受け止める存在である。その姿は、人間に向かってよたよたと走っていく「アホウドリ」と重なる[20]。また、ちよ子よりも「頭ひとつ分大きい」信太の体格からも、大きな「アホウドリ」が連想される。因みに、「アホウドリ」の翼のさしわたし（翼開長）は213～229センチ、体重は4～5kgで、日本では最大級の海鳥である[21]。このような「アホウドリ」と、知的な障がいを持っていても、体は大きく、人間を素直に受け入れるという信太とは密接に結びついている。また、信太は、自然に溶け込み、それを愛する存在でもあることから、自然との結びつきは強い。正しく、「アホウドリ」は信太であると言っても過言ではないだろう。よって、題名だけは改変することができなかったという作者の主張は当然であろう。

四　故郷球磨村

『あほうどり』で描かれる時代は、作者の年齢から考えると、1957年頃、いわゆる高度経済成長時代である。この社会状況から取り残され、昔と変わらず慎ましい生活をしている人々が、作者の故郷球磨村にいた。多分、『あほうどり』が『子どもの館』に投稿された1980年と、作品で描かれる時代（1957年頃）の生活は左程、変化のないものであったろう。だからこそ故郷は、競争社会の中で生きている作者の疲れ切った心を慰めてくれたのである。そこには家族、地域の相互扶助ネットワークが失われることなく、「自然の時間から生まれる自足の暮らし」[22]が存在したのである。そして、そこに暮らす人々こそ、作品の登場人物なのである。作者が作品を描くとき、無意識に球磨村の人々の感情を描いていると述べることからも、また、作者の父親や小学校時代の同級生達が本作品を好んでいることからも、登場人物たちのモデルが球磨村の人々であることは間違いない[23]。

戦後の障害教育に影響を与えた三木安正氏は、「一般児童の中に特殊学級を置くことで、一般児童の知的障害児への理解を高め、人間の価値について正しい見方を与え、彼らを温かく受け入れる態度を養うことができ、修身的教育で欠けていた最も重要な新しい道徳教育のねらいをしなければいけない」と主張した[24]。そして、行政はこの主張を受け、特殊学級の設置を推進することになる。が、その波は球磨村まで届いていない。「信太のような子どもは珍しくなかった」「当時、作者をはじめ球磨村の人々は、信太のような子どもを障がいを持つ子どもとして考えていなかった」[25]という作者の指摘は、知的障がいを持つ子どもとそうでない子どもとの区別はなかったということを示す。それは、仙三じいさんの言葉からも窺うことができる。

「そうか。おかんは、なんと言うても信太じゃなきゃな。信太がつけたお酒に、わしがこさえた、ごはんとおかず。これで足りないものは何もない」（58頁）

「信太がやぶけば、わしが縫う。わしが縫えば信太がやぶく。わかるか、信太。生きてくというのは、そういうことだ。……また、やぶけ。また、わしが縫ってやる」（113頁）

ここには互いの性質を認め合い、協力していく姿勢がある。高度経済成長から取り残され、自給自足に近い生活であったところから生まれた、生活の知恵があった。村という共同体で支え合って、生活を営んでいたのである。作者が第二の故郷と称する北海道も、それと似た生活を人々は営んでいた。作者が親しくしている老人に「北海道の人はどうしてこんなに、だれにでもわけへだてなく親切なのかしらね？」と尋ねると、「一瞬、いぶかしむような顔で沈黙し、やがて『なんもさ』」と答える。

老人によれば、他人への親切は即、自分への親切なのである。零下何十度という冬の寒さは、ちょっとした不注意や事故で死に直結する寒さなので、「必要な時に必要な救助を求めるのは当たり前のことであり、その求めに応じることは、なおさら当然の、人と人との約束事なのだ」という(26)。球磨村もこれと似た状況だった。大川の氾濫、自給自足に近い生活は村人の助け合いが必要不可欠であった。『あほうどり』は、その生活をありのまま描いたものである。障がい者の問題を意図して描いたのではない。だからこそ、作者は信太やちよこを自由に、のびのびと動かすことができたのである。

【注】

(1) 今村葦子氏と筆者（堀畑）の間で交わされた書簡（以下、書簡）2013・3

(2) 長谷川幸男「創作月評　人間讃歌」『日本児童文学』1987・7

(3) 最首悟「子供への大人の願望の結晶化」（初出　雑誌『読書人』1987・4）『最首塾』1987・4

(4) 沼田森「身近なものへの細やかな気配り　自然描写を楽しむ」『図書新聞』1987・4・11

(5) 拙稿『ふたつの家のちえ子』論（上）『国語国文学研究』第49号　熊本大学文学部　国語国文学会編（下）『方位』第31号　熊本近代文学研究会編

(6) 書簡2015・3

(7) 書簡2013・7

(8) 前掲6

(9) 相良の殿様が船遊びの折り休憩した場所で「涼戸の瀬」、「窪場（うけば）瀬」と呼ばれている名所

(10) 今村葦子「熊本の人、東京の人」『くまもとテーブル　vol. 2』熊本県広報課　1994・11

(11) 今村葦子「読売新聞」西日本版　1990・12・20

(12) 八幡ゆかり「知的障害教育の変遷過程にみられる特殊学級の存在意義」『鳴門教育大学紀要　第23巻』

(13) 前掲3

(14) 三木安正『教育学叢書⑮　特殊教育』第一法規　1971

(15) 前掲4

(16) 小川太郎「児童の自然に對する態度」『愛媛県教育研究所紀要』1950　第2集

(17) 書簡2015・10

(18) 小さ子話については、拙稿「『小さ子』話の系譜」（『国語国文学研究第37号　熊本大学文学部国語国文学会編）を参照されたい

(19) 前掲6

(20) 和名は人間が接近しても地表での動きが緩怠で、捕殺が容易だったことに由来する

(21) 公益財団法人 山階鳥類研究所　「アホウドリ復活への展望」

(22) 今村葦子氏が拙稿『ふたつの家のちえ子』論（上）を読み、論文の要旨を「自然の時間から生まれる自足の暮らし」と簡にして要を得た言

葉で表現した。

(23) 書簡　2012・10

(24) 前掲12

(25) 前掲7

(26) 今村葦子「〈風土〉と児童文学」『日本児童文学』　1996・5

【附記】本稿執筆に際しては、今村葦子氏より貴重な資料と御教示を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

（ほりはた　まきこ／大学院二五回修了・熊本高専非常勤）